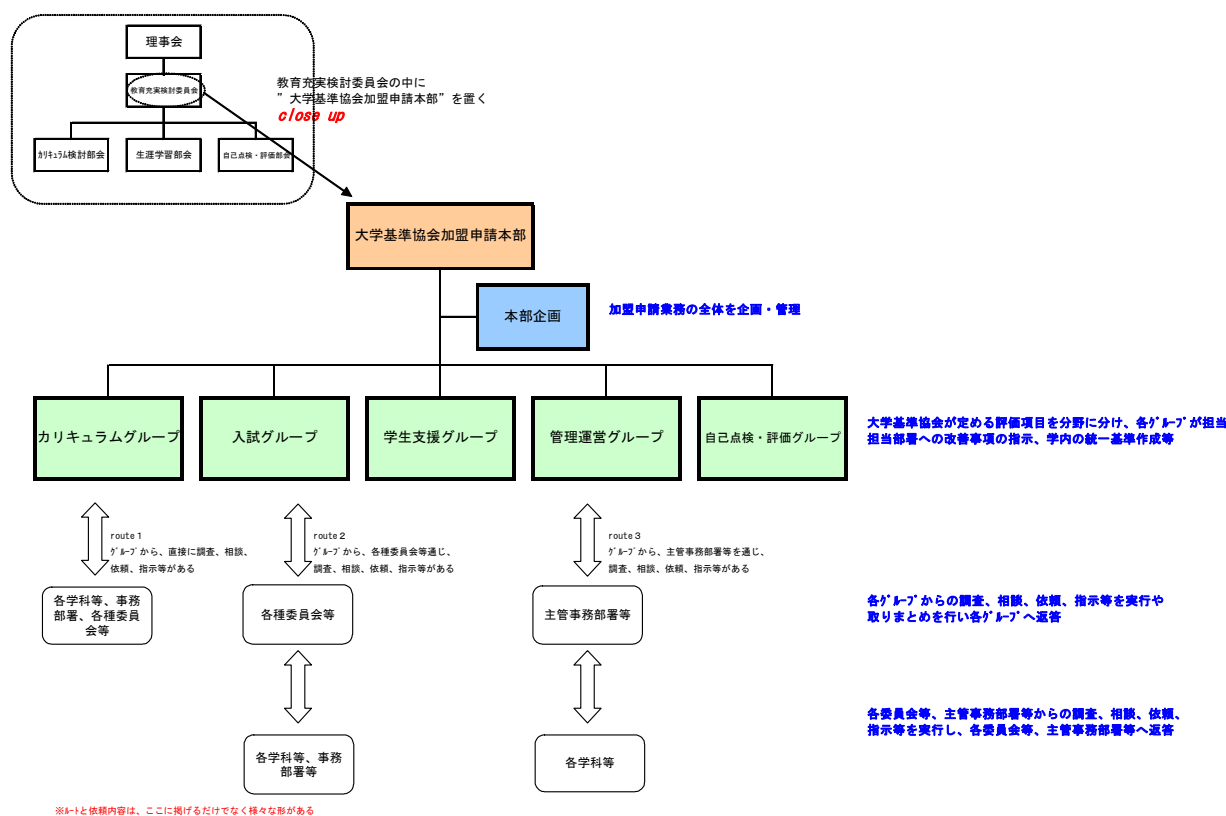


(1) 点検・評価組織

自己点検・評価活動については、理事会の諮問委員会である教育充実検討委員会に自己点検・評価部会を組織している。本学はこれまで独自の自己点検・評価報告書を作成し自己点検・評価に取り組んで来た。2004年度には独自の外部評価を行うなど自己点検・評価に努めて来た。しかしながら、(財)大学基準協会の正会員ではなく、認証評価機関が定めた評価項目に基づき点検・評価活動を行っていない。

本点検・評価活動にあたり、評価項目が多岐に亘る、認証評価機関の評価項目による点検・評価活動が初めてであること等を考慮し、教育充実検討委員会直下に「大学基準協会加盟申請本部」を組織した。

また、「大学基準協会加盟申請本部」に「本部企画・カリキュラム・入試・学生支援・管理運営・自己点検・評価」の6グループを置くこととした。本部企画については、点検・評価活動の進捗管理等の役割を負う。他の各グループについては、担当分野の点検・評価をそれぞれ行うこととした(図I-1参照)。



(図 I-1 大学基準協会加盟申請本部の組織と動き)

(2) 点検・評価の進め方

点検・評価を行うにあたって、上図のとおり①特定の点検・評価委員だけでなく可能な限り多くの教職員が関わること、②自己点検・評価活動のプロセスそのものを重視するこ

とを目指した。同活動が陥りがちな「改善・改革に繋がらない冊子作成」ではなく、改善・改革を推進して行く過程を冊子（本点検・評価報告書）として纏めることを目標としている。

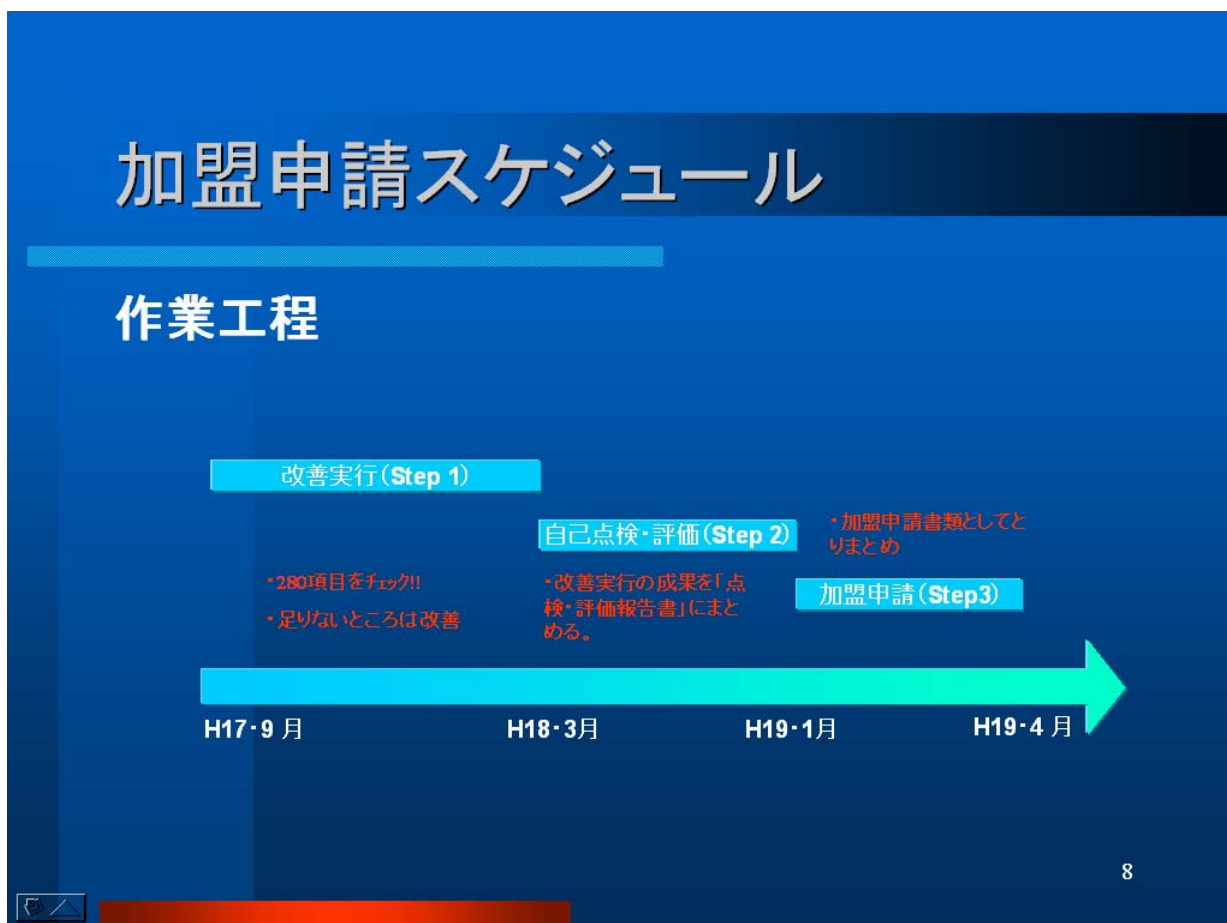
a. トップによる宣言

“プロセスを重視した全員参加型”の活動を進めるため、2005年9月に教授会等で理事長及び学長から本活動の趣旨を説明する「キック・オフ宣言」を行い、(財)大学基準協会への加盟申請を好機と捕らえ、改善・改革を進める宣言を行った。

b. 目的の周知

これを補足し周知徹底を図るため、本部企画グループより学内に対し、本活動の趣旨、進め方等の説明会を計20回ほど行った。また趣旨の周知と、以降のプロセス公開のため、イントラネットに大学基準協会加盟申請本部のホームページを設けた。

c. 活動の進め方



(キック・オフ宣言資料抜粋)

活動の進め方については、上記資料抜粋(※但し加盟申請は2008年に変更)のとおり、ステップを1～3に分け「改善・改革」を前提としているのが特徴である。改善・改革については途上ではあるが、主要なものは実効を得た。その結果・経過を本点検・評価報告

書として纏めている。

d. 改善・改革の成果

改善・改革の成果例を参考までに一部列記すると、

- ・アドミッション、カリキュラム、ディプロマポリシーの策定（2007年入学試験）
- ・教養チャート（教養教育の考え方の定義）の策定（2007年1月）
- ・カリキュラム編成に関する基本的考え方の策定（2007年10月）
- ・各種委員会等の改廃（2007年12月）
- ・研究支援部の設置（2007年6月）
- ・国際交流の基本方針の策定（2007年4月）
- ・入学試験の採点基準の策定（2007年入学試験）
- ・入学試験諸業務の運営見直し（2007年入学試験）
- ・英文ホームページの充実（2007年7月）
- ・中・韓国語ホームページの開設（2008年予定）
- ・リザーブド・ブックシェルフの導入（2007年4月）
- ・カリキュラム会議への資金的補助（2007年1月）
- ・上野毛キャンパスの無線LANの設置（2006年11月）

等その他多数

上記のとおり、組織から詳細な手当まで幅広く、改善・改革を行うことが出来た。

(3) 本点検・評価報告書の理解にあたっての本学の特徴

本点検・評価報告書を理解する上で欠かせない本学の特徴については次のとおりである。

本学は2学部1研究科を有している。美術学部8学科（うち2学科に計5専攻設置）、造形表現学部3学科、大学院美術研究科6専攻から構成されている。

まず始めに学部、研究科の特徴を記述したい。美術学部（昼間部）と造形表現学部（夜間部）については、基本的に専門領域は同一である（美術学部：芸術学科、造形表現学部：映像演劇学科については、各学部独自の専門領域である）。造形表現学部は、美術学部の専門領域の教育を「夜間」と言う機会を通して、社会人等に提供することを主たる目標としている。大学院美術研究科については、両学部の専門領域をより深化することを主たる目標としている。

よって、記述にあたっては、教育目標等の同一性が高いため学部・研究科を分けずに記述している個所が多々ある。

一方、各学部・研究科が設置する学科・専攻については、逆に学科・専攻ごとに専門性が非常に高い。大別すればファインアート（絵画・彫刻・工芸）、デザイン、理論系となるが、各系統の中でも扱う素材や表現手法も異なれば、進路等も全く異なっている。学科・専攻が、一般大学の学部に対応するほどの違いを持っている。

よって、記述にあたっては、教育目標等の離隔性が高いため学科・専攻を分けて記述している個所が多々ある。

(4) 本点検・評価報告書の理解にあたっての留意事項

上記(2)の「c. 活動の進め方」および「d. 改善・改革の成果」で記述したとおり、本点検・評価報告書を纏めるにあたり、点検・評価を行い改善方策の立案だけでなく“実行”を前提にしている。

よって本点検・評価報告書の基準日である2007年5月1日時点で既に改善方策の実効を得たものについては、基本的に現状説明として記述している。しかし本活動一連の改善方策として実行に踏み込み推進して来たものであるため、当該事項については「点検・評価」、「改善方策」として扱うべき事項である。

これらの記述については混乱を避けるため、上述のとおり2007年5月1日を現状説明の基点と採り、現状説明内に改善の実行を含むものについては、後段にこれを補記した。

※記述方法に関する留意事項

「点検・評価報告書」について、記述上の留意事項は次のとおりである。

a. 本学の組織について

本学の組織は美術学部8学科（絵画、彫刻、工芸、グラフィックデザイン、生産デザイン、環境デザイン、情報デザイン、芸術）、造形表現学部3学科（造形、デザイン、映像演劇）、大学院美術研究科博士前期課程5専攻（絵画、彫刻、工芸、デザイン、芸術学）、大学院美術研究科博士後期課程1専攻（美術）により設置認可され組織されている。

絵画学科には日本画、油画、版画の3専攻、生産デザイン学科にはプロダクトデザイン、テキスタイルデザインの2専攻を置いている。教育研究の運営にあたっては、専攻の専門性が高いため、この2学科については専攻を運営の基礎と置いている（専攻ごとに学科長、研究室、施設等を置く）。また、大学院美術研究科博士前期課程についても、同領域を以って運営にあっている。上記運営組織を基礎として本点検・評価報告書の記述を行っている。

b. 記述方法について

- ・点検・評価項目の大区分ごとに章立てを行った。
- ・区分・見出し等に付記される条件等について、次のとおり規定した。
 - ①区分・見出し等ごとに、適用される点検・評価項目を右肩に付した。
 - ②区分・見出し等ごとに、適用される「目標」を赤破線で囲み明示した。

なお、「一. 理念・目的・教育目標」については記述内容により、「目標」を上記囲みで明示していない。

- ③区分・見出し等ごとの右端には、「全学共通」または「組織別」による記述であるか識別する記号を付した。

「◎」：全学共通記述、「●」：組織別記述

なお、「●」：組織別記述については、マイナーパターンとしてキャンパス別記述を含んでいる。また、記述に紙数を割く必要のない事項については組織ごとの項目立てを行っていない場合も適宜含めている。

- ・本文中のデータ等については、2004年4月1日～2007年5月1日までを基本としているが、記述の趣旨から

I. 序章

必要な場合は遡って期間を設定している。なお、2007年5月1日以降に行った改善方策等については随時加えて記述している。

- ・学科については、上記「a. 本学の組織について」の単位で記述している。学科または専攻を含むため「学科等」の文言を使用している。

